内閣文庫		
番號	和 27997	
冊數	62 (12)	
函號	203	29

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

文子園図書記

明治十四年購求

花蔵里

巻名 橘の香とゆつくしき時なる花ちる里をとゝ為てそ名

細 ゆゑよりて号とするや源氏廿四巻又月のくまの記曰

未出れ事也うき迷ひ六月ばかりのこの

ものゆゑやタ立乃比と月乃西比表ハ賢木出れ事より

ハ前出ぬ事なり 年同じく 宗 柳生乃末ハ六月の比より

やタ立れりとなるべし出ハ又月乃ものゆれて元服相

表ハ出ぬ事なり但立月ものゆれて元服相

ものゆゑ立ハ為ものゆゑ

細 人ものゆゑ為ものゆゑ

表 重のゆゑ不明心と重ハ源乃ん臘月表

ゆゑ立ものゆゑ 宗 ものゆゑ

ものゆゑ

まうされハ如此ほそく学問してとりつたへあら
ゝにさしけるるゆゑ如此ゝ細白虹日とはゝゝ
ゝとさゝゝしゝゝと云ふ古歌の侍さ侍ゝ梅行
中也源氏乃清四郎清和也母は藤原氏
法号ゝに白雪日我はゝゝゝ弁ゝ
行基ゝ法師ゝ付くゝゝ
ゝ乃末ゝ乃ゝ
ゝ遺ゝ
ゝ
ゝ

いて給ふよ西ひてくくあさましうもある
る雲ゐにわたるとおぼす　細　ひ花散里のうらうらしうもある
はとあるやうやうを物哀なるにわかれつるを給ふとも
世ちかうなる程也　宗　ひさへうりろひ給うんと思給ふ
ものをとおぼしたる程　宗　ひそ給ふとの給也　あまさへ人といつかたり
人をとも知給中に哀と思給ふ　宗　まく花散里と同給ふ也
同給て大略筆とおぼしたり源氏御京の時大事物ふる
日給ふも花散里とハ筆の御すさびとも
あはれとうるはしうひらくうちあるべしとおぼす
西ひく　河　云　糸　云　糸　也　宗　ちうく生出給ふ也
中河のほとりにもくるに　宗　京極河のうるはしくて
さやうれるうちのこちらとうるはしくもあるに　宗　ひさへ家
あくるあるあるあ

源氏ものがたりの作者は立ちの紫式部
なりとぞ人はいふめる
朝日さす方立ちのぼるひかりもいと同じ
細 此家雅なるものとうちひろがれる家あるべし此時の作者
立ちのぼる紫雲をよみたるとぞ
きこえたりひやすくしひたりしと都にうたがくわるとも
思ひさしてうかれたる河おやうちたるほとる
をあ宿をとをもとれてあ
もしひさしうかれたる白うもあるやう
るとうちとみ物ぐるしう紫式部
るるれたる歌をもとりたる
清車をとりへさきをて出のうれ
細 此の家をもとりたる也

とりつるとうとうとものをもあはれ
細 ほのぐらしひとうとくあ
立海者伝行中よりやう者ほ
世宿をとれあくるうきれ
鳥をちうり侍るみうえ
をもりて三四八と書すやほの
ちひ行て宿のうきひとを
ちんあほ日さやのすれ
さくしてうれたるはる
世のもりれるをしふとも
ひ事者と学新も宗
こ之とをうとて
おほうくたうえ 宗源氏ものがたり

細 此をもて又日乃ものもた
ふうこのの家をさくうしち
はくるとあるや

ひかりてやさとはもていけくるもれは仕そとりてゆくるも
はるるとしなしそれあまとそは那智のうれる又月面のそ
細 四ちるとのみてるもはは付ふかいてさとも保ろうとし
あるはるるおろかれとしよめるも 宗 あ子寺也ちとうし
梅色はいてしをんのしたもれとやうるはれは海
はるるれとはうう源氏のうとれとうめうるも
ふとはしたをとはとみ重は 細 ちうるはまとるる心
はるも 宗 惟光ん河也
しくうんちうねをとて出給と 細 惟光をうとう
あるはりはうう 弁同
花菊 義の様も菊はあひて様しはうもうそうる
河 奥 くはうはをうるれ離菊をうれいんだうをるはるはり
宗 義よはのはくとはひ寄りはるはるはるはるはるはる

光ひとうをを惟光をとるをうんをを ここく
とてはうも

人をまとあはふをはうをはるはをはるはうう 細 思乃女
の四やとおの乃 雲 みを多はるはうも 弁 惟光の定行をを
をうをを女れはうをも思也世引をうく はう 宗 惟光
ん様はうをとてはのはるはめをあるはるはれ女房はは
うをも引奇乃ははうはうれう
はをはるはをはきるはをうをとはうるをはをはををはをも
細 惟光はは行はくはくはは行はくはくはは
よはひくうとはも 宗 源の公行はうはは
はとはのはををををはるくをはもの様はるはも仏女様はるはは
はは又世はの旬ひよはもはる業奏よ行はるはうはは
ひはは乃はうう 宗 源氏乃はうはるれて女のはくはう

をゝ
ものも
ゆりに
あるとも
なほ
やうの
ことに
はくし
の五節
ゆうらう
ことを
ありし
いやと
ま
ゆ
細 大武の
ものを
ゆめ
ゆ
ゆ
ものも
海の
ものに
ものと
原の
始終
心
とも
なほ
人
花同 宋 大武の
むを
ゆめ
ゆ
五節
は
華
ものし
ものと
ものを
ゆ
ゆ
ゆ

つまとうちとけてきこえかはしたるものとも
ちと思ひやりなどはよつもてそもしたるものなきはなほ
ひとしなみてうちとけぬ　細　桐壺の帝の御時の事也
とてとゝ出給也　宗　後撰の詞也
ハ　給ひとゝもさすらへしかとも
ほとゝきすなつかしさのあまりやわたりてゝ
をしたてゝひとりにあらしとおもひしかとも
ひとりさねはしたりとも　細　中川の宮
たんなりし　宗　郭公乃家を主人にまちとる風流
なるやう也
ひとふたとうてゝれと思ひやらんたにもしる　細　引歌同
河　古人のことゝ人へはとゝまりてゝふたりてゝ
ゝとゝ花たちばなとゝ思てそ

細　奥
橘の花とゝ人へ時なるこゝろひとつにてゝ
橘の花ちる里にうゝひゝてゝ山郭公とゝ人へ
代二首を九合ゝ也　宗　花里ゝ出給ふ　宗　源氏
乃事也　時なるとゝ源氏の為なるとゝ
河　赤人集
かくこゝろ　時なる日数とゝ
こゝろひとつにてゝ中のこゝろ花乃むちる里よりもむしやん
ちゝに鳴くいるひとゝ生れてゝ
さゝをゝ四人へとゝひとゝ
ゝ花とゝ
ゝとゝ
とゝ
古乃
ゝ人へ乃事也　細　源の女房へ下給

のちくさめみもちのうへうるとく思乃まさるものも有也
源氏乃羽也去乞へまいらんとも
とうれうまのさるくるものを拾てとを伝をれ 并 古るものを
拾ていちのくさくさうれをうるものをさを拾うるものやとれ
うへをとあうや
へくさのうにをてさうを拾ちれたを苦うるをもうをさうれをへさ
ひとをくぐのうたうのくをまのへはをくるをてうれ
うく拾はさうくんとゆのし路ものに 細 源ハあちのうをとれをし
給よちへ苦乃友ハうく伝くをまして女御ハ御くうけう
みをおをうるをてやをうをうるとも 宋 高代よへ
のへをうをひちをうるとの伝うるものをとを給ものへのをく
うをれとも うをさうのもの 宋 物語ちをとかをさうに
へハはくをうるものをとうを

つをちくをなうせをれハものをとうをくをまてに拾うをつをを
あうを伝をうをのあをうをねをを人のはをを伝うをやを拾く
長うををひをあう 宋 乞ハ女御乃伝をうをと源氏の御心を
をひ路うをや 細 女御乃伝をの中也 宋 伝をうをを
ハををうにうを伝をうをとをを拾をを拾ハをくうを
やハうをまに路伝ハ乳をとを人乃ハをを伝うをやをを女
御のつをくををを伝うををををををををれ
をををを

へををくあれたうを石ハ橋乃をれをて所のはをを拾をれ
細 乳をををのをくをたうををを女ハ乃ハうをを拾ハ
宋 ハををや所の橋をうををををを拾
はををとををひてとを伝
やをうををの伝うをををへをを人をハををををを

[illegible]ゝ[illegible]ゝ　細　故院の御ときは女房なども[illegible]
[illegible]しとのせめてなりぬべきやうにもあれど
[illegible]　古歌の心を花やかにもあらしとや　宋　けるあへ
[illegible]ものといふことをひとつとやとや
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

ちゝ君とあひ給ふ人〳〵をとゝにうらやみあ
細 世ゝ〳〵のこゝろをなびけ給ふ
とゝ君〳〵うらやましく人〳〵
思あるべし 冥 源氏のたゝ
きみ〳〵おぼしねたくおぼしのを
きこえとあらそ〳〵ふ人〳〵をとゝ君〳〵のうらもなりとも
世のさとりをひとりの 細 ふりれあるべく人〳〵をとゝ君なりの
ものあ〳〵ひとりとして恨給ふ人なきたゝ源の性とこそ
冥 世乃さとりとハ世中れあ〳〵きるれあ〳〵ひと源氏の思ひ
ちゝ君のゝ也 思
えの河内なあるとはゆゝうきぬとさやうにく〳〵なりうきあるとに
たゝりあるとゝ帝り 細 中河の宮乃母也 花同 冥 中河の
ひとれ宮也ゝ君と源氏乃ゝとゝ君〳〵わらさるなるゝ
ひゝくゝのゝうゝ君行きゝひとゝ也

国立公文書館
National Archives of Japan